当科における過去4年間の口腔領域悪性腫瘍の臨床統計的観察

山城正宏・藤井信男・宮里 修
本村和弥・金城 孝・呉屋幸子

Statistical observations on the oral malignant tumors in our clinic during past four years

Masahiro YAMASHIRO・Nobuo FUJII・Osamu MIYASATO
Kazuya MOTOMURA・Takashi KINJO・Yukiko GOYA

緒 言

1973年(昭和48)9月,琉球大学保健学部附属病院に歯科口腔外科が開設されて以来,口腔領域悪性腫瘍の治療にも取り組みつつあるが,まだ途上である。開設当初より,1977年(昭和52)8月までの4年間に受診した口腔領域悪性腫瘍患者の臨床統計的観察を試みたので,第1報として報告する。

調査方法および結果

1. 対象および頻度

1973年9月より,1977年8月までの過去4年間に,当科を訪れた口腔領域悪性腫瘍患者は94例であった。その内訳は,癌腫85例,肉腫7例,その他2例で,一次(新鮮)症例77例,二次症例17例であった。年次別にみると,1976年の28例が最も多く,平均してほぼ23名(一次患者19名)が毎年新患として来院している。これは外来患者総数の約2%に相当する(表1)。

2. 性別および年齢別

94例の性別をみると,男性54例,女性40例で,男性:女性は1.4:1と男性に多くみられた。年齢別では,50歳代に最も多く,次いで60歳代,70歳代,40歳代の順で,40歳代以上が全体の88.3%を占めていた。最年少者は,8歳女性の頬部肉腫で,癌腫では18歳男性の舌癌であり,最高年齢は84歳女性の下顎歯槽骨肉癌であった(表2)。一次症例77例(81.9%)の男女比は1.5:1でやはり男性に多くみられた。一次症例の年齢別をみると,60歳代に最も多く,次いで50歳代,70歳代で,40歳代以上が

同じく88.3%を占めていた(表3)。

3. 初発より来院までの期間

一次症例77例の,症状を自覚してから当科来院までの期間をみると,3か月以内に来院したものが最も多く,次いで6か月以内であった。3か月以内の比較的早期に来院したものは50.6%で,半数は3か月を過ぎてから来院している。なお1年以上が8例みられた(表4)。

4. 紹介機関

一次症例77例の当科への紹介機関をみると,歯科医院が25例で最も多く,次いで病院歯科または他科19例,当病院他科17例,一般開業医14例などの順であった。直接当科へ来院したのは1例であった(表5)。

5. 組織別

癌腫85例中,扁平上皮癌は78例(91.8%)で,次いで腺様嚢胞癌4例,腺癌1例,粘表皮癌1例,転移性大細胞型未分化癌1例であった(表6)。癌腫一次症例69例中,扁平上皮癌は63例(91.3%)で,同じく9割を占めていた(表7)。肉腫7例は,細網肉腫3例,筋原性肉腫1例,骨原性肉腫1例,肉腫の組織型不詳1例で,その他は,悪性エナメル上皮腫1例,悪性黒色腫1例であった(表8)。

6. 発生部位

癌腫85例の発生部位をみると,舌癌31例(36.5%)と最も多く,次いで上下歯槽骨肉癌21例(24.7%),口峽咽頭癌8例(9.4%),口底癌7例(8.2%),頬粘膜癌,上顎洞癌各6例(7.1%),その他(大唾液腺癌)4例(4.7%)などであった。口腔癌66例中では,舌癌47.0%,上下歯槽骨肉癌31.8%を示した(表6)。癌腫一次症例69例についてみると,舌癌24例(34.8%),上下歯槽骨肉癌16例(23.2%)で,口腔癌一次症例におけるこれらの割合は,口腔癌全症例と同様であった(表7)。

7. TNM 分類

口腔領域原発癌腫で,上顎洞性癌,大唾液腺癌,多発性癌を除き,今回は口唇癌,口峽咽頭癌を含めた54例についてTNM分類を行った。T₃症例は30例(55.5%)で,最も多く,次いでT₂21例(38.9%),T₁3例(5.6%)

琉球大学保健学部附属病院歯科口腔外科(主任:山城正宏助教授)

Department of Dent-Oral Surgery, Ryukyu University Hospital, Ryukyu University(Chief: Assist. Prof. Masahiro Yamashiro)

受付日:昭和54年10月31日

表 1 口腔領域悪性腫瘍の年度別症例数

	癌 腫			肉 腫			その他	計
	一次 男 女	二次 男 女	計	一次 男 女	二次 男 女	計	一次 男 女	
1973年 (9～12月)	2 2 (4)	1 2 (3)	7	1 (1)		1		8
1974年 (1～12月)	4 7 (11)	3 3 (6)	17	1 1 (2)		2		19
1975年 (1～12月)	10 6 (16)	2 1 (3)	19		1 (1)	1		20
1976年 (1～12月)	16 8 (24)	2 1 (3)	27	1 (1)		1		28
1977年 (1～8月)	10 4 (14)	1 (1)	15	1 1 (2)		2	1 1 (2)	19
計	69	16	85	6	1	7	2	94

表 2 口腔領域悪性腫瘍の年齢分布 (94症例)

性別 組織別 年齢	男				女				計
	癌 腫	肉 腫	その他	計	癌 腫	肉 腫	その他	計	
～19	1			1		1		1	2
20～29					1			1	1
30～39	4			4	3	1		4	8
40～49	4	1		5	4		1	5	10
50～59	14	1		15	10	2		12	27
60～69	16			16	8			8	24
70～79	8	1	1	10	6			6	16
80～	3			3	3			3	6
計	50	3	1	54	35	4	1	40	94

表 3 口腔領域悪性腫瘍の年齢分布 (一次症例 77例)

性別 組織別 年齢	男				女				計
	癌 腫	肉 腫	その他	計	癌 腫	肉 腫	その他	計	
～19	1			1		1		1	2
20～29					1			1	1
30～39	4			4	1	1		2	6
40～49	4	1		5	3		1	4	9
50～59	11	1		12	6	1		7	19
60～69	14			14	7			7	21
70～79	6	1	1	8	6			6	14
80～	2			2	3			3	5
計	42	3	1	46	27	3	1	31	77

表 4 症状自覚より当科来院までの期間
(一次症例 77例)

年 月	症 例 数
～ 2 週	1
～ 1 か月	8
～ 3 か月	30
～ 6 か月	22
～ 1 年	9
～ 3 年	6
3 年 ～	2
計	77

表 5 口腔領域悪性腫瘍の当科受診までの経過
(一次症例 77例)

	症 例 数		
	男	女	計 (%)
直 接 来 院	0	1	1 (1.3)
歯 科 医 院	18	7	25 (32.5)
病院 歯科, 他科	12	7	19 (24.6)
一 般 開 業 医	7	7	14 (18.2)
当 病 院 他 科	9	8	17 (22.1)
そ の 他	0	1	1 (1.3)

表 6 組織型別, 部位別例数 (癌腫85例)

部 位 組織別	頬粘膜	下顎歯槽肉	上顎歯槽肉	硬口蓋	舌	口 底	口 峡 咽 頭	口 唇	上顎洞	そ の 他	計
扁 平 上 皮 癌	6	15	5	1	31	6	6	1	6	1	78
腺 様 嚢 胞 癌						1	1			2	4
腺 癌										1	1
粘 表 皮 癌							1				1
大細胞型未分化癌			1								1
計	6	15	6	1	31	7	8	1	6	4	85

表 7 組織型別, 部位別例数 (癌腫, 一次症例 69例)

部 位 組織型	頬粘膜	下顎歯槽肉	上顎歯槽肉	硬口蓋	舌	口 底	口 峡 咽 頭	口 唇	上顎洞	そ の 他	計
扁 平 上 皮 癌	4	12	3	1	24	6	6	1	5	1	63
腺 様 嚢 胞 癌							1			2	3
腺 癌										1	1
粘 表 皮 癌							1				1
大細胞型未分化癌			1								1
計	4	12	4	1	24	6	8	1	5	4	69

表 8

肉 腫			
細 網 肉 腫			3
筋 原 性 肉 腫			2
骨 原 性 肉 腫			1
不 詳			1
			計 7 例
そ の 他			
悪性エナメル上皮腫			1 例
悪 性 黒 色 腫			1 例

%)であった。これを部位別にみると、舌癌、口唇癌を除いたすべてに T₃ 症例が最も多くみられた。また舌癌では T₂ が最も多く、次いで T₃、T₁ の順であった(表 9)。臨床的リンパ節転移のあると思われる N_{1b}+N_{2b}+N₃ は 32 例 (59.3%) で、N₃ は 15 例 (27.8%) を示した。また初診時に遠隔転移を疑った M₁ は 1 例であった(表 10)。

8. Stage 分類

口腔領域癌腫 54 例の Stage 分類を行うと、Stage IV が 26 例 (48.1%) と最も多く、次いで Stage III 13 例 (24.1%)、Stage II 12 例 (22.2%) で、Stage I は 3 例

表 9 口腔領域癌腫54症例の部位、およびT分類

部 位	T ₁	T ₂	T ₃	計
頬 粘 膜		1	2	3
下顎歯槽, 歯肉		3	8	11
上顎歯槽, 歯肉		1	2	3
舌	3	11	8	22
口 底		1	5	6
口 峡 咽 頭		3	5	8
口 唇		1		1
計	3	21	30	54

表 10 口腔領域癌腫 54 症例の T, N 分類

	T ₁	T ₂	T ₃	計
No		1	2	3
N ₁ a	1	5	3	9
b		3	3	6
N ₂ a	2	7	1	10
b		4	7	11
N ₃		1	14	15
計	3	21	30	54

(5.6%)であった(表11)。

考 察

沖縄県の人口はほぼ100万人で、本州、九州とは遠く海を隔てており、距離的、経済的にも容易に他府県には行けず、また多くの離島を有して医療面においても種々の問題点をかかえている。沖縄県における口腔癌の発生頻度は、患者が病院他科などを受診する場合もあり、その実態はまだ明らかでない。

1973年9月より1977年8月までの4年間に受診した口腔領域悪性腫瘍患者は94例、一次症例77例(81.9%)であった。94例の性別をみると、男女比で1.4:1と男性に多くみられた。上野¹⁾は1.8:1、堂原²⁾は2.1:1と述べ、鷺津³⁾は口腔癌一次症例で2:1と報告している。当科の口腔癌症例は1.6:1であった。年齢別では、50歳代に最も多く、次いで60歳代、70歳代、40歳代の順で、40歳代以上が全体の9割近くを占めていたが、これは他報告¹⁻³⁾も同様であった。

一次症例77例について、症状を自覚してから当科来院までの期間をみると、約半数が3か月以上経てから来院している。当科への紹介機関をみると、病院歯科または他科(本院含む)を合わせて46.8%を占め、歯科医院が32.5%で約1/3を占めた。

組織別にみると、92例中、癌腫:肉腫は12.1:1で、上野⁴⁾は9.8:1、堂原²⁾は15.3:1と報告している。また癌腫85例中、扁平上皮癌は91.8%で、その大部分を占めていたが、他報告^{2,5)}も同様であった。発生部位をみると、癌腫85例中、舌癌は31例(36.5%)と最も多く、次いで上下歯槽歯肉癌21例(24.7%)などで、口唇癌は1例のみであった。口腔癌66例中では、舌癌47.0%、上下歯槽歯肉癌31.8%を示し、この両者ではほぼ8割を占めていた。口腔癌の部位別頻度で、上野⁴⁾は舌癌25.6%、歯肉癌48.0%、鷺津³⁾は、舌癌58.1%、歯肉癌10.7%と報告している。これは歯科大学病院と癌専門病院の相違を示している。

表 11 Stage 別症例数

	症 例 数
Stage I	3
Stage II	12
Stage III	13
Stage IV	26
計	54

1968年のUICCによるTNM分類⁶⁾で、口腔癌は口唇癌および口咽頭癌が含まれているが、1974年のTNM分類⁷⁾で、これらは除かれている。今回はこれらを加え、多発癌⁸⁾を除いた口腔領域癌腫54症例についてTNM分類を行った。T₃症例は30例(55.5%)で最も多く、次いでT₂21例(38.9%)、T₁3例(5.6%)で、T₁が少なくT₃が半数以上を占めていた。臨床的リンパ節転移N_{1b}+N_{2b}+N₃は32例(59.3%)で、初診時すでに6割近くに臨床的リンパ節転移があると診断された。N₃は15例(27.8%)で、他に23.2%²⁾の報告もみられる。臨床的リンパ節転移は、26.5%²⁾、27.1%³⁾、41.8%⁸⁾、56.9%¹⁰⁾などの報告があり、本例も高い値を示したが、さらにその病理組織学的検索¹⁰⁾が必要である。

これら54症例のStage分類をみると、Stage I(5.6%)は非常に少なく、他報告^{2,8)}に比べてStage IV(48.1%)が多くみられ、初診時ですでに進行癌の多い傾向が認められた。今回は、当科開設以来の年月が浅く、生存率などを出すに至っていないが、今後さらに症例を加えて、治療法、予後についても検討する予定である。

結 論

1. 1973年9月、琉球大学保健学部附属病院に歯科口腔外科が開設されて以来、1977年8月までの4年間に来院した口腔領域悪性腫瘍患者は94例、一次症例77例(81.9%)であった。

2. 性別では男性54例, 女性40例で, その比は1.4:1であった。年齢別では50歳代に最も多く, 次いで60歳代, 70歳代などの順で, 40歳代以上が全体の88.3%を占めていた。

3. 組織別では, 癌腫85例(一次症例69例), 肉腫7例, その他2例であった。口腔癌66例中, 舌癌47.0%, 上下歯槽歯肉癌31.8%などで, この両者ではほぼ8割を占めていた。

4. 口腔領域癌腫54症例のTNM分類で, T₁3例, T₂21例, T₃30例で, T₃が最も多く, T₁は少なかった。臨床的リンパ節転移, N_{1b}+N_{2b}+N₃は32例(59.3%)であった。

5. Stage分類で, 54症例中 Stage I 3例, Stage II 12例, Stage III 13例, Stage IV 26例で, 初診時ですでに進行癌の多いことが認められた。

本報告の要旨は, 第22回日本口腔外科学会総会において発表した。

引用文献

1) 上野 正: 口腔癌の治療に関する研究. 口病誌

36: 4 1969.

2) 堂原義美, 他: わが教室における過去10年間の顎口腔領域悪性腫瘍の臨床統計的観察. 日口外誌 25: 548 1979.

3) 驚津邦雄: 口腔癌の現況とその動向(上). 歯界展望 47: 357 1976.

4) 上野 正: 口腔癌——最近の研究展望——. 癌の臨床 20: 169 1974.

5) 中原和郎, 他: 頭頸部腫瘍図譜. 中山書店, 東京, 1975, 203頁.

6) UICC: TNM classification of malignant tumours. Geneva, 1968, International Union Against Cancer, Switzerland.

7) UICC: TNM classification of malignant tumours. Geneva, 1974, International Union Against Cancer, Switzerland.

8) 戸塚盛雄: 口腔領域悪性腫瘍新鮮症例の臨床, 組織および細胞学的研究. 口病誌 38: 94 1971.

9) 中村杜綱, 他: わが教室10年間の口腔癌の臨床統計的観察. 日口外誌 23: 533 1977.

10) 新垣 晋: 口腔領域悪性腫瘍の頸部リンパ節転移に関する臨床病理学的研究. 日口外誌 25: 784 1979.